

7-7 生物多様性の保全と啓発活動への取り組み

名古屋大学博物館は、名古屋大学の研究・教育に関わる資料を保全・研究して後生に伝えるとともに、それらに関する展示・普及教育を通して、名古屋大学の教育研究の成果や学問の豊かさを、学生から一般の方まで幅広い方に知ってもらう役割を担っています。生物多様性の保全は地球環境問題だけでなく科学研究における重要な関心事であり、博物館でも、生物標本の保存や情報の公開、希少生物の保全・調査、そして生物多様性の重要性を伝える普及活動などの形で、生物多様性の保全に積極的に関わっています。

生物の多様性とは、地球上に存在する数千万種ともいわれる生物の多様さ、そしてそれら生物の生き方の多様さを指します。しかし、その保全というのは、単に目の前の生物を殺さないようにするというだけでは決してありません。それらの生物の生活史を明らかにすると同時に、生物が今まで歩んできた進化の道筋を探り、それらの情報を蓄積して未来へ伝えることが、生物の多様性をより豊かに残すことにつながるのです。また、絶滅が危惧される生物に注目し、それらを積極的に調査・育成することも、多様性を保つための優先課題です。そして、生物多様性の貴重さ・保全の重要性をより多くの人に知ってもらうことも、多様性に携わる者が負うべき大切な使命なのです。



熱帯雨林の多様性に関する展示

博物館では、海の生物や植物を中心に生物の分類学的研究を進め、多くの新種を発表してきました。また、放散虫の化石という、生物進化などに関する重要な標本を約7万点保存し、データベースでの公表を行っています。現生の生物では、蘚苔類の標本を約6万点管理し、2008年までに約8千点のデータベース化を完了させました。地域の生物多様性の把握にも取り組み、2008年には、東海地方を中心とする昆虫の標本を約2万5千点の寄贈を受けて、現在データベース化を進めています。

また生物の保全活動としては、陸上植物の起源に関わるシャジクモ類について、絶滅危惧種をふくむ約20種の系統維持に取り組んでいます。野外観察園では、ヒトツバタゴなど東海地方における絶滅危惧種を積極的に収集し栽培するほか、環境指標にも使われる日本最小のトンボ、ハッチョウトンボの生息環境保全を行っています。

生物多様性とその保全についての啓発活動にも精力的に取り組んでいます。2008年には、博物館の改修とともに常設展示をリニューアルし、東海地方の自然誌の展示に生物関連のコーナーを増設したほか、熱帯雨林の生物多様性についての展示を新設しました。また、2008年冬には日本野鳥の会愛知県支部との共催で、企画展「愛知の野鳥」を開催しました。普及教育活動としては、海の生物多様性を実際に観察して学ぶネイチャーウォッチング、キャンパスの野鳥の観察会などを行ったほか、生物の構造の多様性を電子顕微鏡で学ぶ「ミクロの探検隊」を開催しています。これらをはじめとする博物館の普及教育事業には子供から一般まで様々な方から応募があり、2008年だけでのべ約600名が参加しています。このほか博物館では、野外観察園を一般公開することで多様な植物を散策しながら学べる環境を提供しており、2008年には約1,500人の見学者が訪れました。

多様性の正しい把握と保全を進めるには、大学をはじめとする専門機関での研究と、研究者からの情報発信が重要な鍵を握っています。名古屋大学博物館では上記のような様々な活動を続けるほか、今後はさらなる展開として、大学全体をミュージアムととらえ（キャンパスミュージアム構想）、東山丘陵の動植物から多様性を学びとれるような活動も企画しています。



野外観察園での体験学習



(博物館 助教 西田 佐知子)